当院 POCUS にて、高次医療機関での早期外科的治療の必要性を指摘できた症例

◎立脇 愛優[1)]、三宅 穂岳[1)]、澤井 真美[1)]、山本 民[1)]
公益社団法人 京都保健会 京都民医連中央病院[1)]

【はじめに】
当院では、緊急性の高い疾患が疑われる場合、検査技師が救急外来で Point of Care Ultrasound(POCUS)を実施することがある。当院は、心臓血管外科がなく、経皮的冠動脈形成術（Percutaneous Coronary Intervention：PCI）対応ができない日があるため、早期転院の必要性を迅速に判断することが求められている。今回、当院で行われた心臓領域における POCUS により高次医療機関での早期外科的治療の必要性を指摘できた症例を報告する。
【症例】
90 代女性。既往歴には間質性肺炎があり、主訴は 1 週間ほど持続する全身倦怠感と呼吸苦で、他院に救急搬送され他院にて間質性肺炎、心不全の増悪が疑われたため精査目的で当院に転院した。搬入時胸部症状の訴えは無かったが、心電図にて II、III、aVF、V2-V5 で ST 上昇の変化が認められた。心臓 POCUS では、左室前壁の乳頭筋レベルから心尖部にかけて壁運動低下が見られたため当院にてカテーテル予定であった。しかし、心尖部に左室から右室への短絡血流が確認され、亜急性心筋梗塞による心室中隔穿孔(Ventricular Septal Perforation：VSP)が疑われたため、精査および手術目的で高次医療機関へ転院した。
【結語】
迅速な結果を求められる救急外来での POCUS において、疑われる疾患の鑑別のために必要な検査を的確に判断することが求められる。患者情報や臨床所見から、疑われる疾患や合併症を予測しながら検査を進める必要がある。近年、タスク・シフト/シェアが進み、救急外来に臨床検査技師を常駐する施設が増加している。今後の臨床検査技師に求められる需要に対応するためにも、POCUS だけでなく、静脈路確保などの技術を身に着けておく必要がある。連絡先：京都民医連中央病院（代表）075-861-2220